

〈書評〉

伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編
『モダンガールと植民地的近代
——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』
(岩波書店 2010年 317+12頁 ISBN978-4-00-025306-2 3,200円+税)

大橋 史恵



はじめに

19世紀末から20世紀初頭、世界中のいたる地域で、既存の女性観を大きく覆すような大胆な服装や髪形、振る舞いを身に着け、複数の社会空間を往来し、闊達自在に自己を表現しようとする「モダンガール」あるいは「新女性」「新しい女」「新婦女」の存在が社会的注目を集めた。そのモダンガールが約100年を経て新たに、世界中のいたるところの地域の研究者たちの関心を呼んでいる。本書はそのような知的潮流のなかでも一種の転換点となるような共同研究の成果論文集である。

序論にも触れられているように、個々の近代的女性主体に注目した研究は、1970年代後半ごろから蓄積されてきた。これと比較して1990年代後半以降の研究は、資本、帝国の拡張やそれとかわる国民国家形成の文脈においてモダンガールをとらえようとしてきた。いわばモダンガールを個々の「点」としてではなく、重層的な政治・社会関係のなかで立ち現れた「現象」として理解しようとしているのである。

例として、東アジア近代女性史・ジェンダー史研究会が1990年代後半以降、日本だけでなく韓国・中国・台湾等のジェンダー史研究者のネットワークを通じて、植民地期東アジアにおけるナショナリズムとジェンダー秩序との連関に目を向けた共同研究をおこない、この現象を取り上げている(早川他2007)¹。また本書の編者でもあるタニ・E・バーロウが、アリス・E・ワインバウム、リン・M・トーマス、プリティ・ラママーフィー、ウタ・G・ポイガー、マドレーヌ・ユエ・ドンとともに2000年に結成した「世界のモダンガール」研究会(米国・ワシントン大学)は、欧米、アジア、アフリカ、オーストラリア、旧ソ連等、世界中で同時多発的かつ相互参照的に発生し、連鎖していくような現象としてのモダンガールについて、その背後における地球規模での商品や文化の流通に目を配った考察をおこなった(The Modern Girl around the World Research Group ed., 2008)。そして本書の基盤となった「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール研究会」は2002年に活動を開始した。以来、先立って成立した研究コミュニティと直接的交流を重ねつつ、独自の知見を提示している。やや印象論的な感想であるが、モダンガールにかかわる近年の研究活動のネットワークが、その対象と同様、複数の地域や方法論を越境しながら展開していることは興味深い。

本稿は、このように1990年代末頃から同時多発的・相互参照的におこなわれているモダンガール研究のなかで、本書が切り開いた新しい視座について論じていく。

序論で示されているように、本書の関心は、モダンガールとしての実在の女性主体、そうした女性を好奇や揶揄のまなざしの下に取り扱った(多くの場合は男性による)言説や表象よりも、「アジアの植民地的近代において、いまだ不在のモダンな女性をめぐるさまざまな層の願望、欲望、ファンタジーの

投影として位置づけられる」ような「像としてのモダンガール」(2頁)に向けられている。像としてのモダンガールは、新聞や雑誌の広告、ポスター、漫画や小説等を通じた、大胆な髪形や服装、シガレット、香水や化粧品といった奢侈品、「自由恋愛」の模索や男性を圧倒する強い態度、エロティックで魅惑的な風貌や身のこなしのなかに表れる。このような特徴をそなえもつモダンガールは、実在のモデルが存在したか否かに関係なく、さまざまな層にわたって社会的影響力をもつアイコンであった。本書は1920年代から30年代の東アジアが、資源獲得と市場の拡大を目指す欧米や日本にとって重要な地理的フィールドであったことをおさえた上で、そのような地政学的空間においてモダンガールが、一方で資本と帝国の欲望を色濃く反映し、一方でその趨勢への同調や呼応、あるいは抵抗や敵意を反復的に呼び起こすような像として立ち現れていたことを明らかにしようと試みている。

ここで重要なのが「植民地的近代」(colonial modernity)の概念である。序論は、植民地主義を通じて「近代化」や「発展」が達成されるというような一方的な歴史観を注意深く否定し、宗主国と植民地との関係が不平等なものとして秩序化されるそのプロセスに注意すべきであると明記している(8-9頁)。宗主国と植民地のあいだには、商品や文化表象、そして人の越境的移動を通じて、連環的な関係が生じる。この関係は必ずしも宗主国側のヘゲモニーと植民地側の服従を意味するわけではなく、ときに反発や停滞をも呼び込みながら、近代のありようそのものを維持・再生産していく——植民地的近代とは、この視座から近代を読み解く上での分析概念である。この意図を理解したうえで本書を読んでいくと、像としてのモダンガールが、宗主国と植民地とのあいだの結節点として重要な意味をもっていたことが浮かび上がるだろう。

以上の問題意識の下に、本書は「資本の欲望」「まなごしの政治」「帝国を生きる」の3つのセクションから構成されている。それぞれのセクションに収められた論文の内容を簡単に紹介し、モダンガールをめぐる本書の議論の到達点を探ることにしたい。

1 資本の欲望

第1章(足立真理子)は、後発資本主義国である日本が、舶来奢侈品に並ぶ化粧品産業を国内で育成しようとする際に、必然的に植民地関係を参照していたことに着目している。実際には、奢侈品を購入することができるような女性は、当時の日本に存在していなかった。しかしそのような女性の「欲望」は、満洲、中国、朝鮮半島、日本を越境するアイコンであった李香蘭に代表される、像としてのモダンガールのなかに表象されていた。足立はさらに、不在の対象へと向かう資本の欲望の背後で、奢侈品の原料調達と軍事とが結びついていたことを指摘し、植民地的近代における資本と国家権力との共謀の局面を暴き出す。

第2章(タニ・E・バーロウ)は、両大戦間期の中国で流行していた通俗社会学と、広告におけるセクシー・モダンガール表象とを題材にしている。この題材をめぐってバーロウは、ジジエク(Zižek 1989=2001)のいう「もう一つの光景」(the other scene)に目を向ける。つまり思考の外側であって日常的思考のありかたを準備するような象徴的秩序を、商品の使用価値についての問題関心へと接続させた議論をおこなっている。女性主体は、広告におけるセクシー・モダンガールのアイコンを媒介し、近代的とされる身体美や商品使用法についての知識を獲得する。このとき、「使用価値のもう一つの光景」は、女性とその日常において「遅れた中国」の伝統的従属から脱し、「先進国の」近代的な主体位置へ

と自らを投企するよう、欲望への働きかけをおこなっていた。

2 まなざしの政治

第3章（ヴェラ・マッキー）は、ポスター、絵画、漫画等の表象を題材に、植民地的近代の「視覚レジーム」(scopic regime)をとらえる。モダンガールという現象は世界中で同時多発的に発生したのであるが、マッキーは異国間をまたぐ商品や表象の流れが、それぞれの地域での違いや時期的な差を生み出していたことを指摘する。宗主国日本の女性の像、その周縁の女性の像、地域間を移動する女性の像、あるいはそのようなモダンガールたちに相対する男性の像は、視覚表象において、ジェンダー、階層、エスニシティ、人種のなかに分類づけられた。宗主国の主体としての男女が、他者との関係における自己の視点／立ち位置を構築する過程でそのような分類秩序を参照していたことが浮き彫りになる。

第4章（坂元ひろ子）は、まさに植民地的近代の地政学的産物である租界をそなえもつ上海で活躍した、前衛漫画家たちの存在とその作品における表象に目を向けている。『上海漫画』誌において前衛的男性アーティストたちは上海モダンガールを題材に、あるときは女性の身体の躍動をモチーフにし、あるときは消費志向性や性的享楽性を揶揄した。こうした表象は、女性の主体性を認知する男性の意識を浮かび上がらせるものでもあった。しかしこの承認のまなざしは後続の『時代漫画』誌では影をひそめる。日中戦争の影響下で、モダンガール・モダンボーイは無知や退廃の象徴として批判的に描かれるようになっていく。この気運において「抗う」モダンガール像を描いた女性漫画家、梁白波は今日の私たちにも深い印象を残す。向かい合うヌードの纏足女性とモダンガールの姿は、女性を性的客体から主体へ、そして主体同士の連帯可能性へと導くように思われる。

第5章（牟田和恵）は、重なる時期に登場した「新しい女」「モガ」「良妻賢母」という日本の近代的女性像の交差を、国民国家形成におけるジェンダーの政治と結びつけて論じる。奢侈性・物質性・享楽性・退廃性をそなえもつ「モガ」は、近代的自立主体としての「新しい女」と対立するようなイメージであった。一方「良妻賢母」は、国家イデオロギーの要請において「新しい女」と「モガ」の双方を否定した。しかしその「良妻賢母」は実は私的領域に位置し、消費を専業とするという点で「モガ」とその性質を共にしている。三者は相互に対立しつつ相補性をもつのであり、この関係性からは植民地的近代における「女」の配置をめぐる力学が浮かび上がる。

3 帝国を生きる

第6章（小檜山ルイ）は日本の都市中間層女性を読者とする『婦人之友』誌において羽仁もと子が展開した洋装運動を取り上げている。羽仁の洋装運動は、西洋と植民地の双方のまなざしを意識したものであり、「帝国の中心」における近代的女性主体の構築を推進しようとしていた。このとき『婦人之友』は、女性たちに対して「流行」という資本の欲望に操られることなく「合理的判断」において主体的に洋装を選択するよう要請していた。そのような要請においてモダンガールは、資本の欲望に操られ、消費主義へと巻き込まれるような存在とみなされた。

第7章（バーバラ・H・佐藤）は、モダンガールというアイコンに架けられた消費主義が都市中心的・中流階級的であったことをとらえ、そのようなモダニティをほとんど共有しない下層中流階級と労働者階級

の女性たちが、「モダンなるもの」にどのように接していたかを議論している。植民地的近代において、大衆雑誌は日本だけでなく台湾や朝鮮の下層中流階層や労働者階級の女性たちの日常生活に入り込んだ。こうした女性たちは読者であっただけでなく、自ら投書をおこないもした。大衆雑誌を介してモダンガールのイメージは、豊かでない階層の女性たちの内面に働きかけ、消費主義や植民地化のなかでの主体構築へとつながっていった。

第8章（伊藤るり）は「内地」でありながら日本帝国の周辺に位置付けられた沖縄から、東京など帝国中心の都市、台湾をはじめとする植民地各地域、さらにその他地域へと移動を模索した女性主体に焦点を当てる。沖縄の女学生たちは、さまざまな文化的背景をたずさえて赴任する教員たちとの接触や、多文化の混交と序列を通じて「モダン」であることを希求し、知識人の知的サークルに接することで東京への移動を志向していった。実際に内地に「遊学」した女性たちは、映画鑑賞、写真、ダンスなどを獲得するモダンガールであった。それは植民地的近代の家族から期待される「修養」の域を超えるものであり、沖縄女性たちは出自であるエリート家族のジェンダー秩序を組み替えるような主体となっていった。

第9章（洪郁如）は、植民地的近代の台湾におけるモダンガール現象を、ファッションを通じて分析している。小檜山論文（第6章）に登場する羽仁もと子は、西洋と植民地との参照のなかで女性たちが主体的に洋装化を志向するよう働きかけていたが、台湾では中・和・洋の三種類の服装をいかに選択するかということがジェンダーの政治を引き起こしていた。「モダン」であることの実践は、「支那人」という差別的な記号をとまなうチャイナドレスと、日本的身体を要する和服の着こなしや礼儀作法のいずれにおいても困難であった。そのなかで洋装は、モダニティの実践において最も「気楽」なファッションであった。

第10章（金恩実）は植民地朝鮮における代表的な「新女性」として知られる女性画家、羅蕙錫の生涯を取り上げている。日本への留学、結婚と出産、離婚、欧米漫遊の経験を背景に、彼女の近代的自我がどのように変遷したのかを追うのであるが、この考察は「植民地的近代」をいかに認識するかという本書全体の問いにつながっている。従来の解釈は、羅蕙錫は西欧に準拠して朝鮮社会を批判する近代主義者であり、朝鮮に位置する自らの現実を否定していたととらえる。金はこれに対して、複数の時間的・空間的地点を転移することでかたちづくられ、さらに変化し続けた羅蕙錫の主体位置を、植民地的近代とジェンダーの連環において理解する視点を提示している。

おわりに

以下10篇の論文を通じて、本書は東アジアの植民地的近代において、モダンガールの表象がいかに商品の生産－流通－購買と結びつき、資本の欲望とその展開を実現させてきたか（第1部）、それぞれの地政学的領域における権力関係や、それへの抵抗を介在するまなざしが近代的女性に関するイメージをどのように配置してきたか（第2部）、帝国主義の展開において異なる階層、異なる地理空間を生きる女性が、いかなる政治プロセスにおいて近代的主体として位置づけられてきたか（第3部）を描き出している。宗主国側である日本や西洋諸国はもちろんのこと、上海、台湾、朝鮮とともに、沖縄が植民地関係のなかに取り上げられていること、またモダンガールというアイコンがその受け手として前提する階層上位の女性たちのみでなく、下層中流階層や労働者階級にも焦点が当たっていることが、本書の構成

をより意義深いものとしている。折々に記述されているとおり、植民地的近代という概念が内包する問題意識は、今日もこれらの地域が直面する不平等な社会関係をも貫くものであり、グローバル化の現状との連環のなかに理解すべきであることを考えさせられる。

最後に本書の構成についてあえて指摘するのであれば、日本が南満州鉄道の敷設を通じて大きな影響を及ぼし、その後は傀儡政権を打ち立てた中国東北部／満州国についての記述が、相対的に少ないのではないだろうか。東アジアのさまざまな地域をまたいで活躍したモダンガールの代表的アイコンであり、本書表紙にも描かれる李香蘭（山口淑子）も、序論にあるようにその出生のルーツを満鉄顧問の父と女子大卒の母にもっていた。そもそも満洲史についてジェンダー視点から掘り下げる研究は蓄積が少ない²。おそらく史料自体が稀少であると思われるが、「像としてのモダンガール」というアイデアを得て、今後この研究領域が発展していくことを期待する。

（おおはし・ふみえ／日本学術振興会特別研究員）

注

- 1 拙稿ながら『ジェンダー研究』第11号に掲載された書評において、この共同研究によるモダンガール分析について言及している（大橋 2008）。本稿とあわせて参照していただければ幸いである。
- 2 早川他（2007）の末次玲子論文、佐々木啓・蘇林論文、沈潔論文が満州のジェンダー史について貴重な分析をおこなっている。

引用文献

- The Modern Girl around the World Research Group ed., *The Modern Girl Around the World: Consumption, Modernity, and Globalization*. Durham and London: Duke University Press, 2008.
- Žižek, Slavoy, *The Sublime Object of Ideology*., New York: Verso Books, 1989. (スラヴォイ・ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出書房新社、2001年)。
- 大橋史恵「書評『東アジアの国民国家とジェンダー——女性像をめぐる』」、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』第11号（通巻28号）（2008年）：pp. 137-142.
- 早川紀代・李熒娘・江上幸子・加藤千香子編『東アジアの国民国家とジェンダー——女性像をめぐる』青木書店、2007年。